



南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標

求めよう、神のちむがなさを！
守ろう、沖縄における人権を！
探そう、真の平和への道を！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2

カトリック那覇教区本部

TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474

発行人 W.F.バートン司教 1部40円

<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2019年8月1日 (毎月1日発行)

カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第729号 (8月号)

平和は「すべての人の全人的 発展の実り」

今年も「日本カトリック平和旬間」(八月六日～十五日)を迎えるに当たり、日本カトリック司教協議会会長、長崎大司教区の高見三明大司教の談話が発表されました。

一九八一年二月二十五日、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は、広島で鮮烈な平和アピールをなさいました。そのアピールに呼応して日本の教会は翌年から「日本カトリック平和旬間」(八月六日～十五日)をもうけて、平和について考え、平和のため、祈り行動するよう努めてきました。

「広島平和アピール」から三十八年九カ月後の今年十一月、教皇フランシスコが日本を訪問され、新たな平和メッセージを世界に向けて発信してくださいとの期待しています。

教皇フランシスコは、就任以来、折に触れて平和と核兵器廃絶について発言してこられました。二〇一七年七月七日、国連総会で「核兵器禁止条約」という画期的な条約が採択されました。これに先立つ三月二十三日、教皇は国連総会に次のようなメッセージを送られました。



テロ、軍事力の差のある者同士の紛争、情報の安全確保、環境の問題、貧困などは、複雑に絡み合っており、現代世界の平和と安全を脅かしています。しかし核の脅威はそのような課題に

らに増し、諸国民の信頼関係を損なうだけです。もしそうなら、その安定をどれだけ維持できるか自問すべきです。「国際平和と安定は、互いの破壊または全滅の脅威とか、単なる力の均衡の維持といった、誤った安心感の上に成り立ち得ません。平和は、正義、人間の全人的

発展、基本的な人権の尊重、被造物の保護、すべての人の社会生活への参加、諸国民間の信頼、平和を重んじる制度の促進、教育と福祉の恩恵に浴すること、対話と連帯の上に築かれなければならないかもしれません。」なお、バチカンでは「核兵器禁止条約」を最初に批准した三カ国の一つです(九月二十日)、十一月には国際会議「核兵器のない世界と総合的軍縮への展望」を主催しました。

教皇フランシスコによると、「すべての人の全人的発展」とは、諸国民の間に経済格差や排除がないこと、社会がだれ一人排除されず、だれもが参加できる開かれたものであること、人間の成長発展になくてはならない経済、文化、家庭生活、宗教などが保障されること、個人が自由であると同時に共同体の一員であること、一人ひとりに神が現存されることなどを意味します。平和は、この「すべての人の全人的発展の実り」として生まれるのです(使徒的勧告「福音の喜び」一一九)。従って、世界の平和と安全を築き確かなものとするためには、核兵器廃絶によって核の脅威を払拭するだけではなく、それと同時にす

べての人があらゆる面でより豊かにされていく必要があるということです。

教皇とともに、核兵器廃絶の実現を求めつつ、すべての人の全人的発展に深くかわかることによって平和をつくっていくことができるよう、平和の神に熱心に祈り、それぞれができることから始めるようにいたしましょう。(二〇一九年七月七日)

スローガン 沖縄から世界へ広げよう平和の祈り

第29回

祈りと平和の集い

■日時：8月15日(木)午前10時30分～

■場所：沖縄平和祈念堂(摩文仁)

主催 沖縄宗教者の会

ST. CLARE AND THE PRIORITY OF CHRIST

By : Fr. Claver Anthony D'souza

Saint Clare was born into a wealthy family in the year 1193. When she was eighteen years old, a charismatic wonderworker by the name of Francis came to preach a series of Lenten sermons at the church of St. Giorio in the town of Assisi. Clare was cut to the heart by Francis' words and literally left behind everything to enact in her own life Francis' call to embrace evangelical poverty.

Clare's commitment to Francis' spiritual vision would blossom into a community of sisters who would serve as a sisterly counterpart to Francis' spiritual brotherhood. Clare and her sisters would accept nothing that would diminish her commitment to evangelical poverty. She and her sisters would share all things in common. They would sleep on the ground and would not even accept sandals for their feet.



If such radicalism shocks and provokes us, it is doing precisely what it is meant to do.

Evangelical poverty is about belonging to Jesus Christ with the whole of one's being. Such a commitment requires a rigorous detachment from one's desires. The spiritual commitment of evangelical poverty is directed as a contrary to all that false beliefs that continually assert that we are defined by what we own, by how much money and property that we can accumulate, by our status or class, and by our need for security and control.

Our relationship with Christ insists that more important than any of these things, which are by their nature finite and passing away, is our eternal identity as the children of God in Christ.

Such dedication is a mysterious spiritual path that all are called to consider, but few are called to embrace in its totality. It should not be confused with a dualism or hatred of the material, but a prophetic charism that calls humanity to consider the truth that this world is not ultimate and the grace of creation is mitigated by our desire to possess it without acknowledging that what God has created is meant to lead us to share in his divine life.

The practical benefit of evangelical poverty is love. In choosing to have less, we offer to someone else more and discipline ourselves to accept that it is of greater value to give than to receive.

新任シスター紹介



シスター
アイビー・バイラルカル・バヤノ
(Sr.Ivy Bayarcal Bayno) OND

フィリピン・セブ生まれ
2012年 3月 26日 初誓願
2019年 3月 25日 終生誓願
2019年 7月 26日 沖縄へ着任

シスターアイビーが所属するオブレート・ノートルダム修道女会は、現在宮古島市に拠点を置き、宮古島に2人、石垣島で1人が那覇教区でご奉仕くださっています。シスターアイビーは先ず2年間の日本語教育を沖縄本島の学校で学んだ後、宮古、石垣におられる先輩のシスターたちと協力して那覇教区で働かれる予定です。新しく来られたシスターのためお祈りください。

The other gift of evangelical poverty is humility. Evangelical poverty necessitates that one eschew honors, rewards, and recognition. It demands that we take our place not with the mighty and the powerful, but as the servant of the poor and afflicted. It radiates the peace of mind of a disciple, the contrary disposition to the worldly who, fearing that loss of their worldly things, are beset with anxiety and fear.

The witness of Saint Clare reminds us that it is integral to our mission as disciples of the Lord to accept the full implication of our act of faith in him. God gives to us his Beloved Son, a grace which has value beyond that of anything in the world. The gift of Christ is so tremendous that all our desires and attachments are relativized in his wake. We have in Christ everything, and all things find their proper place in relation to his priority.

May Christ permit us to be poor, like Saint Clare, so that we might share, as she does, in the riches of his own divine life.



ガジュマルの 樹の下で

古川 政孝 O.F.M.Conv.
開南教会 主任司祭



教会の門を左に行くと、裁判所通りに出る。琉球アカギの並木通りは時代と共に、たくさん
の想いがつまった通りでもある。
裁判所、那覇拘置支所、合同庁舎と建物が続いている。七、八分
も歩くと中央公園がある。毎朝
ラジオ体操に使われたり、グラ
ンド・ゴルフの場所にもなってい
る。午後には、テニスを楽しむ
コートもあり、野球やサッカー
を楽しむグラウンドがある。

そのネットがあるだけの雑然
とした草原に、私のお気に入り
のガジュマルの樹がある。ベ
ンチが置かれてありストレッチ
(柔軟体操)をしたり、ただただ

ボートと一時間でも
二時間でも座ってい
てもあきない空間で
ある。私の部屋より、
聖堂よりも心落ちつ
きそうなスポットで
ある。
教会の門を右に行
くと幼稚園の体育館
がある。そこは七十
年前に最初に教会堂
が建てられた跡地ら
しい。カプチンの聖

段を降りてゆくと、中央公園の
エリアに入り、私のお気に入り
のベンチがある。
ガジュマルの樹の下で、ベン
チに座っていると、青年が一人、
ボールを力一杯蹴っていた。パッ
クネットに向かって、何回も何
回も。幼い頃はサッカー少年だっ
たのだろうか。体を動かしたく
なつてか、あるいは会社や家庭
の人間関係に疲れてか、はたま
たストレス解消だったのか...

そんな余計な想像をめぐらし
ていると、さわやかな風が吹い
て来た。ふと、奄美大島が浮か
んできた。そう、今頃夏の夕暮れ、
黄昏時、ある海辺の集落を散歩
していると、ガジュマルのうっ
そうと茂った下に、床几台があつ
た。その散歩道には、モクマオ
ウや、アダンがあり、浜木綿が
咲いていた。夕涼みにおじいや
おばあ様達が潮風を受け寄せ返
す波の音を聞きながら歩してい
る。本当にゆつたりと時の流れ
を体全体で、享受されていると
いった具合だった。ガジュマル
の樹の下にある床几台では二人、
三人、いや七、八人の人々が集つ
てお茶と茶受け(大根と魚味噌
だったと思う)をいただきなが
らゆんたくされている。私も仲
間に入れていただいて、しばらく

くすると、三線が運ばれ奏でら
れた。まさしく島の歌遊びの始
まりであつた。始めの頃、私は
なにを歌われているのか分から
なかつたが、朝花節など、招きや、
その返し歌とその時々、の想いが
歌われていると聞き、まさしく
平安時代の歌遊びだと知り感激
したものだ。月明かりのもとで、
至福の時間が流れていた。

刑務所跡地に教会堂が建てら
れた歴史、人間誰もがかかえて
いる小さき者としての弱さ、罪
深さ、そして罪悪感。まことの
自由を得るために、私達はたく
さんのものから解放される必要
を思う。
とらわれない心で、毎日を、
感謝の心で、生きている人々こ
そ、本当の豊かさを味わってい
る人々ではないだろうか。ガジュ
マルの樹の下で、夕方から月夜
まで味わった奄美での時こそ、
なにもものにもかえられない神秘
的また崇高な喜びの時だったと
思う。サッカーボールを力強く
蹴っていた青年を見ながら、こ
の地で過ごされたであろう受刑
者を想い、人の生涯の不可思議
さを感じる。大地に根を
張れと語りかけるように、ガジュ
マルの樹は生きてゆく。ガジュ
マルのたれ下がった気根は大地
に達すると太い幹になり根づい
てゆく。浮き足だった毎日であ
るわたしの日々の歩みも、この
ガジュマルから学ぶものがたく
さんある。いや、ガジュマルに
は、昔からケンムン(沖繩ではキ
ジムナー)が宿っているからこ
そ、私達にいろいろな示唆をあ
たえてくれるのかもしれない。

フランシスコ修道会が来沖して
最初に建てられた教会である。
そのコーナーをまた右に曲がる
と数メートルも歩かないうちに
高さ五メートルもあるうか、冷
え冷えとしたセメントの壁が百
メートル位にわたって建てられ
ている。殺風景な内側と外側を
遮断した壁である。少し歩くと、
目隠しの為に植えられたのだろ
うか、フク木がある。そして階

間に入れていただいて、しばらく

私の居室から裁判の判決を
まっている人々の息づかいが聞
こえてきそうである。生きとし
生ける者、赤ちゃんとなつてこ
の世に生まれでた子に幸せであ
れと願わない親はいないだろう。
法治国家、社会にあつて、法に
ふれること罪を犯すこと、他人
の地位、名誉、生命、財産を
おびやかす行為に至らせるも
の...。人の生涯は一筋縄では
語れないが、私にも誰にでもあ
りうるであろう現実だ。一、三
年前にお手紙を頂いて、たびた
び拘留所を訪れた。そこではた
だ聞くだけの私がおり、すべて
をご存知である天の父に願うほ
かは何もできなかった。教皇さ
まは、よく受刑者を訪問してお
られるそうだ。弁護士として働
いている方々もまた教誨師とし
て保護師として関わられている
人々もたくさんいる。私もでき

たえてくれるのかもしれない。

あなたにとって、忘れられない感動や出逢い、心を揺さぶられるような出来事はありますか？

私は洗礼を受けてから十年が過ぎました。ふと足を止めてこれまで自分が歩んできた道を振り返ってみると、たくさんの方々に逢い導かれていたことがわかります。教会や修道院、カトリック文化センターなどでの一人ひとりとのお出逢いは、私にとってその中に存在するイエス様との出逢いでした。

二〇〇九年の復活祭に洗礼を受けて三ヶ月後の夏、私の代母のすずめが那須にあるトラピスト修道院を数名の友人と一緒に訪問する機会がありました。そこはとても静かで空気が澄んでいて、個人的な黙想や心の休息のために滞在することができ、宿泊施設もありました。一泊二日の小旅行のつもりで行ったのですが、心のこもった食事や受付のシスターの心遣い、静かな大自然、そしてなによりそこで味わった詩編の祈りが私にとって忘れられないものとなりました。修道院での祈りは、一つ一つの言葉を大切に唱え、歌い、そしてその祈りが本当に天の御父へ届いているような感覚を覚えました。

那須トラピスト修道院は、隠

たて軸よこ軸

出逢い導かれて

安里教会 津波古 薫

世共住修道院生活（モナスチカ生活）という神への絶えざる祈りと奉仕の使命を与えられた厳律シスター修道会で、聖ベネディクトの戒律に従って修道生活を送っています。

修道院では、一日七回の祈りがあります。夜課および朝と晩の祈りと寝る前の祈りのほかに、定時課といって日中に三回の祈りがあります。修道院の祈りの時間では、三時課（八時半）、六時課（十一時五十分）、九時課（一時三十五分）です。一日を主とともに歩みます。

ので、神の言葉の賛課、詩編一一九で祈ります。

・六時課は主が十字架に上られた時刻。悪と戦う人々の苦しみに一致しつつ、苦しむキリストの祈りを続けます。受難の詩編で祈ります。

・九時課は午後三時、主が死なれた時刻。永遠のエルサレムに上られたキリストの祈りを祈る、というわけで、詩編一二〇（一三一）までの都詣での詩編を祈ります。

「Ora et Labora」（祈り、働き）のモットーのうちに午前の仕事を終えると、主が十字架に上られた時刻の六時課の祈り、そして昼食のあと午後一時三十五分から行われる九時課の祈りは各仕事場で行われます。

修道院内で出来ることは自給していて、農業と

製菓（トラピストガレット）づくりをしています。労働の中で、主が死なれた時刻（午後三時）に九時課を唱えます。午後四時三十分には午後の仕事が終わります。それから主の晩餐の時刻に、晩課と呼ばれる晩の祈りと黙祷で主の晩餐を記念します。イエス様は過越の夜、ユダヤ教の伝統に従って過越のハレルの詩編を歌ってからキドロン谷に向かわれたと考えられ、ハレルの詩編および主の晩餐の記念、聖体の制定に関する聖体賛歌の詩編をもって祈ります。そして夕

食の後午後七時三十分から寝る前の祈りである終課、サルヴェ・レジーナが歌われます。一日の終わりは人の生涯の終わりのシンボルで、この世を旅する者のいのち・喜び・希望であるおとめマリアにとりなした祈りつつ、すべての罪のゆるしを願う、父である神への完全な委託のうちに一日を閉じ、午後八時に就寝となります。（那須トラピスト修道院、修道院の一日より）

それから時は過ぎ、忙しい日々を過ごしていたある日、ふと八年前に訪問した那須のトラピスト修道院のことが思い出されました。もう一度あの祈りの時間を一人静かに過ごしながら、自分のこれからの人生をどのように生きて行くか、自分自身と向き合いながら真剣に考えたいと思いました。そして昨年、再びその機会を得ることができ訪問すると、そこには八年前と変わらないあの祈りと時間がありました。そこで出逢ったシスターや訪問客、本などを通して、新たな自分を見つけ歩んでいく道を見つけたことができました。

神様の道は太い綱でひっぱってくれたら分かりやすいが、実際は細い糸のようなもので私たちをひっぱっているのだとあるシスターから聞きました。心を静かに耳を傾けることが難しい現代社会で、神様が呼びかける方へ素直な気持ちと信頼を持つて歩み続けたいと思います。



NPO 法人ぶどう園の会

訪問看護ステーションクララ

TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

・基本受付 月曜日～金曜日（申込、相談など）

・営業時間 8:30～17:30

・営業日 24時間365日（緊急対応含む）



那覇教区平和委員会



日時：8月25日（日）午後2時～4時

場所：カトリック安里教会

講師：中川 克史氏 共同通信編集委員

（元論説副委員長・元那覇支局長）横浜教区 磯子教会所属

演題：「地の塩となりたい～記者として、信者として～」
（仮題）

カトリック那覇教区平和委員会

問い合わせ ☎090-1949-6569（稲福）

8月
例会

2019年7月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時: 2019年7月2日(火) 10:00~12:30 開催場所: 教区センターホール(安里教会)

1. 報告及び連絡事項

- ・前回(6月会議)の議事録に沿って新田が報告と確認。
- ・司会のウェイン司教より、司教、司祭の休暇、会議、研修会等の不在予定が報告された。
- ・6月10日~14日に行われた3教区合同黙想会について、津波古事務局長より黙想会の内容と会計報告が行われた。来年は沖縄開催となるので、黙想会の指導者の選任や会場等について意見交換がなされた。継続審議としつつも概ね従来通りとする方向性でまとまった。
- ・6.23慰霊の日の平和巡礼についてウェイン司教から報告が行われた。30年ぶりに雨天となった巡礼だったが、県内外から多くの参加者を得て、例年通り実施できたことを感謝したい。今後も平和への思いを1つに巡礼に取組んでいくので協力をお願いしたい。
- ・カリタス・ジャパン排除ゼロキャンペーンのリレー写真展についてマーシーさんから中間報告が行われた。寄せられた献金はカリタス・ジャパンへ届けられ、様々な活動への支援金として活用されること等が報告された。
- ・前に報告のあったONDのシスターの来沖予定についてウェイン司教から報告があった。7月26日にフィリピンからシスターアイビーが来沖して、宮古と石垣に2人ずつ常駐していただけるよう要請している。総長様も近々来沖されるが、新任のシスターには先ず日本語学校へ通う予定であること等が報告された。
- ・サマーキャンプについて。担当のヨアキム神父より、日程とテーマの報告、協力要請があった。準備や片付け作業は、他所の小教区の人たちとの協力、交流の機会ともなるので、多くの皆さんの参加を呼びかけて欲しい旨要請があった。なお、宮古、石垣からヘルパーとして参加するシスター達のため、教区への交通費負担の要請があり、了承された。
 - 7月15日(月)、安里教会にてヘルパー研修会を実施予定。
 - 7月28日(日)、教会ビーチの大掃除とテント設営。
 - 7月29日(月)~31日(水)、小学生キャンプ。
 - 8月1日(木)~4日(日)、中高生キャンプ。
 - 8月4日(日)、キャンプの後片付け。
- ・カトリック学園研修大会へのお誘い。
 - 7月27日(土)、安里教会を会場に、午前9時~午後5時まで、「モンテッソーリのコスミック(宇宙的)なヴィジョン」をテーマに開催される。司祭たちも参加して、学園職員たちとの交流の機会としていただけるよう要請があった。
- ・8月23日(金) 午前9時30分~11時まで、学校法人研修部主催のITやソーシャルメディアについての研修会が安里教会ホールで行われるので、それらをよく活用している司祭たちにも参加が呼びかけられた。
- ・その他
 - 教区女性の会から、ラサール神父と稲国神父、有馬神父への感謝と慰労の志が届けられ、ウェイン司教より手渡された。

2. 審議事項

- ・マーシーさんより2019年度の教区予定表の記載漏れや追加記載等の確認作業が行われた。7月28日は小祿教会訪問の予定であったが、サマーキャンプの準備を優先させるため、日程を変更することが報告された。なお、ウェイン司教の意向として、教会訪問の際は歓迎会などのパーティーよりも信徒たちとゆっくり話す時間を取って欲しいとの要望が述べられた。
- ・経済問題評議会の設置について、ウェイン司教と津波古事務局長から説明が行われた。小教区のお金は那覇教区の会計として、最終的には司教の責任で報告されるものなので、会計は厳密に行って欲しい。小教区の金銭の出入りは、主任司祭の責任で正確に行っていたきたい。支出は信徒総会時の予算案に従ってなされるべきで、準備された総会資料等をないがしろにしてはならない。また、多額の現金等は手元に置かないで、必ず預金しておくようお願いしたい。再度の確認事項として、ミサ謝礼は半分を司祭が受取り、半分は小教区会計に入れること。冠婚葬祭等の謝礼についても、司祭が受取るのは1万円を上限とし、それ以上の額は小教区の会計に入れるよう要請があった。税制上の優遇措置を受けている宗教法人へは厳しい目が向けられるので、主任司祭だからとて勝手なことはしないで、予算額から10万円を超える小教区の支出については、事前に教区と相談して行うよう要請があった。なお、小教区にはそれぞれに様々な問題がある。経済問題評議会を設置して、司祭と信徒が協議する場を設けることが大切なこと。小教区が使っている土地、建物等は教区の財産であって、司祭の個人的な所有物ではない。活用にあたっては、信徒たちとよく協議して了解を得、最終的には教区の許可を得て進めるべきものである。その他、通帳と印鑑は別々に管理しておくことなどの注意点にも言及があった。
- ・司牧評議会(教会法第537条)とカテキスタ養成プログラム、第2回信徒評議会の開催についても審議予定であったが、時間がオーバーしたため、継続審議となった。
- ・8月の司祭会議はお休み、次回は9月3日(火) 10:00~12:00 ミッションビーチで行われる。会議の後は昼食にBBQを頂く予定であることが報告された。

2019年7月16日

記録: 新田 選
承認: ウェイン司教



那覇教区平和委員会



慰霊の日 沖縄は祈りに包まれた

6月23日(日)、沖縄・慰霊の日。カトリック教会では第33回平和巡礼が行われた。朝6時、小禄教会のミサに100名が参加。この日はキリストの聖体の祝日でもあった。

説教

「コリントの教会への手紙に『主イエスは引き渡される夜、パンを取り、感謝をささげてそれを裂き、これはあなたのための私の体である、私の記念としてこのように行いなさい』と記されています。

イエスは受難の道を歩みだす直前、弟子たちを最後の晩餐の席に招き、パンをご自分の記念として弟子たちに遺されました。

パンはイエスのしるしであり、イエスのすべてを顕し、思い起こすものとなりました。弟子たちが分かち合ったパンは、食事を共にした記憶だけでなく、イエスの歩み、イエスの受難、十字架の道、十字架上の死、そして復活を現わすものです。しかし、弟子たちはイエスの受難、十字架の道、十字架上の死の下で、イエスを見捨て、逃げていました。誰一人としてイエスの十字架を担おうとしたものはいませんでした。イエスの死すら見届ける者はいなかったのです。それにもかかわらず、イエスは復活を通してその弟子たちを再び呼び集め、食卓を共にし、パンを分かち合いました。パンを手にした弟子たちの心の内は、復活したイエスに出会うという衝撃的な喜びだけでなく、イエスを見捨てた重い負い目をも感じていたに違いありません。さて、巡礼の参考に仲宗根政善さんの書かれた詩を紹介します。仲宗根さんはひめゆり学徒隊を引率した一人の教師でした。

タイトルは「戦争へ引きずられていった罪」

あの時は どうにもならなかったと
 どうして言えるであろうか
 戦争への歯車にはめこまれ
 ひきずられて
 戦争へと生徒を引率した
 教師の責任である
 不明にして
 さめた眼ももたず
 戦争へ引きずられていった罪である
 その根は深く恐ろしい
 私は 今もその重い負い目を
 負いつづけている

仲宗根さんは、ひめゆり学徒たちの悲劇、平和への思いを伝える使命を、生涯ささげて果たしてこられました。

この「重い負い目」、「使命」は仲宗根さんと弟子たちと共通するものがあります。いま、食卓を共にし、ともにパ

ンを分かち合う私たちは、犠牲となった先祖を想い、平和への決意を新たにして巡礼の道へと歩みだしましょう。」

証言

小禄教会女性部が用意した朝食のおにぎりを食べたあと、7時に参加者百名は雨の中、16キロメートルの巡礼に旅立った。翁長バス停、グループホーム千寿、ひめゆりの塔の三か所で、沖縄戦の証言が読み上げられ、犠牲者のための祈りが捧げられた。

今年の証言は、今も辺野古、高江で座り込みをしているオジイ、オバアたちの証言^(注)であった。対馬丸の生き残り平良啓子さん、鉄血勤皇隊に招集された古堅実吉さん、戦場の中を逃げまどった島袋文子さん。この3名の方々に座り込みに参加させているもの、それは、それぞれの十字架、重い負い目、犠牲となった仲間たちへの無念さ、戦場に2度と若者たちを送り込みたくないという願いであった。この切実なる思いはまさにチムグリサという言葉で表現するにふさわしいものであった。

魂魄の塔

正午、200名の巡礼者たちは魂魄の塔に結集した。今年は残念ながら、降雨のためカトリック学園の中学生は先に帰り、合流はならなかった。魂魄の塔の前では、ウェイン司教の平和メッセージが読み上げられた。このメッセージは本誌先月号の一頁に掲載されているので、ここではコメントを省く。ただ、巡礼に参加できなかった那覇教区の司祭、助祭たちには熟読、理解を求めたい。

なぜなら、このメッセージには沖縄の人々の心、叫び、チムグリサが表現されているからである。司祭たちにはこれをチム(肝)に銘じて宣教司牧の活動指針として受け止めていただきたい。

平和メッセージ朗読のあと、魂魄の塔に献花、千羽鶴の奉納が行われた。この千羽鶴は、一枚一枚の色紙にアヴェ・マリアの祈りが印刷されており、沖縄戦の犠牲者のために祈りをささげながら折られたものである。沖縄の女性たちだけでなく、本土の女性団体もこれに参加した。

巡礼の最後に、「月桃の花」を参加者は歌った。

6月23日待たず 月桃の花 散りました
 長いながい 煙たなびく ふるさとの夏

この日、摩文仁の「平和の礎」でも、多くの遺族が犠牲者の刻銘に指をなぞりながら祈っていた。沖縄は犠牲者への祈り、平和への祈りに包まれた。

(注) 証言は『沖縄戦最後の証言』(森住卓著 新日本出版社 2016)を基にしている。

(平和委員会 谷 大二 名誉司教)



サダナの黙想会に参加して

安里教会 西原裕子

去る五月三十日～六月二日までの四日間、名護の愛楽園教会では初めてのサダナの黙想会が行なわれました。私自身は二回目の参加でしたが、前回の与那原聖クララ修道院での初めての参加の時の恵みがありにも大きくて、今回もとても楽しみに心待ちにしておりました。というのも私は、大切な信仰の場である教会から長く離れていて、迷える羊の状態であった時に、またこの信仰の場に戻るこ

また、その他の教会の方達の奉仕によつてすばらしい場所や食事などが提供され、その中で長年サダナのガイドをされているイエズス会の植栗神父様の御指導で、毎日の黙想が始まりました。

サダナの黙想とは、「東洋の冥想とキリスト者の祈り」とも言われ、頭で考える事をやめ、自分の体の感覚を感じていく事をします。そうして、体を正直にしてあげて、頭をからっぽにすると心が楽になってくるという事です。私自身黙想で自分の体の痛い所を強く感じていくと、終わった後に痛みをあまり感じなくなり不思議と体が楽に感じました。うれしい事に、このような黙想を続けていくとその人の体の一部に神様が住んで下さると教えて頂き、私はまだまだそのような感覚を持つ事はできませんが、いつか感じる事ができるかもしれないと希望を持つ事ができました。また、室内だけでなく愛楽園の施設内にある自然の砂浜での歩く冥想は、とてもすばらしいものでした。

何事にも変えがたい神様の私への大きな愛を感じる事ができ、信じる事ができるようになった前回のサダナ、はたして今度はどんなお恵みがあるだろうと向った愛楽園は、とても悲しい歴史のある場所という事でしたが、美しい自然の中、悲しい場所であるはずなのに何かとても聖なるものを感じられる場所でした。愛楽園教会の方達の御好意と、名護教会の方達の

あいにくのくもり空の中、雨が降り中止になるのではという状態でしたが、不思議と冥想中は雨が降る事もなく、皆で一列になり神父様を先頭に、波うちぎわを水の感触や砂の感触を足の裏で感じながら歩きつづけました。終わった時は、皆心の中が喜びでいっぱいになるのを感じました。植栗神父様が「波があんまりかわいい波で、神様の愛のように止まる事がないんだもん」とおっしゃった言葉が忘れられません。私にとつて二度目のサダナ参加もさらに恵み深いものとなり、少しずつですが、神様を近くに感じられるようになってきています。

もつと近くに神様を感じたい、もつと神様に触れたい、そう願ひまた希望を持つ事ができたすばらしい愛楽園でのサダナの黙想会でした。ぜひ次回もこのすばらしい愛楽園という場所で行えたらと皆で祈っていました。ありがたいう事に来年の五月二十八日から五月三十一日の四日間、サダナ・アドバンスが愛楽園で行われる事が決定しました。また、ひきつづき六月一日はサダナフォローアップが与那原聖クララ修道院にて行われます。次回も今からとてもわくわくして楽しみです。

今回この愛楽園というすばらしい場所を準備し、愛の奉仕をして下さった仲間達、そしてガイドして下さった植栗神父様、いつも見守って下さった神様に感謝致します。

ハンセン病回復者のみなさまと家族のみなさま そして、すでに天に召された方々へ

日本カトリック司教団

わたしたちカトリック教会の日本司教団は、ハンセン病回復者のみなさまと家族のみなさま、そして、すでに天に召された方々への謝罪を表明いたします。まず、これまで「らい予防法」が廃止された1996年、熊本地裁判決において国の責任が認められ、回復者（元患者）に対して補償が行われた2001年、そして「ハンセン病問題に関する検証会議」が被害の実態と原因、再発防止のための施策を「最終報告書」としてまとめた2005年の折も、司教団として、回復者、家族への謝罪を表明せず、今日に至ったことをお詫びします。ハンセン病について世界では、1943年に特効薬プロミンが開発され速やかに治癒する病気になったことを受け、1956年の「ローマ宣言」（患者の保護及び社会復帰に関する国際会議決議）で、「らい予防法」のような差別的な法律の撤廃が宣言されました。にもかかわらず、日本の国策は2001年まで変わらず、終生絶対隔離が続けられました。日本の司教団は、ハンセン病患者を隔離し絶滅させるという国策に対し反対することもなく、入所者のみなさまの奪われていた権利の回復を求めるのでもなく、人生被害を増大させたことに気付かず、当事者の権利を守る視点に立てませんでした。そして、ハンセン病患者・回復者、その家族に対し、長い間、言葉にできないほどの苦しみを与えてしまったことを深く反省します。現在、全国の療養所に入所されている方々も家族の方々も年を重ね、すでに高齢になられていることを踏まえ、これ以上の謝罪の遅れは許されません。ここに、わたしたち日本のカトリック司教団は、ハンセン病回復者のみなさまと家族のみなさま、そしてすでに天に召された方々に対して、当事者たちの当然の権利を守る視点に立てなかった責任を認め、謝罪いたします。そして、今後再び同じような過ちを犯すことのないように、主イエス・キリストに倣って、人を大切にし、人権尊重にもとることのないよう、心より誓うものです。（2019年7月10日）

教区 NEWS 教会

新年度を迎えて

石川教会

新年からすでに半年以上も経って季節はもはや夏だというのに、今ここに新年度を迎える喜びを書くのはなほだ非常識に思われますが、当教会にとってはやっと新年度を迎えられたという実感がいっぱいです。間違いなく新年です。石川教会として一人立ちできるという希望が一人ひとりの胸に湧いてきました。

どうしてこんな状況になったのか、他の教会では信じられないと思いますが、典礼行事や教会行事が規定通りに行えないことが最大の問題点です。典礼行事は神父様の支えがあつて滞りなくできていて霊的にも信仰心にも一人ひとりが不満を感じることもなく過ごす事ができていても、肝心なことに心の一致が得られていない状況なのでさびしい暗い雰囲気毎日が過ぎていました。

活気に満ちた教会を目指して前進しよう。新年度の信徒総会が待ち望まれていました。司祭の異動が発表され、当教会にはアジット神父様が赴任されました。神様のお恵みだと思いました。大改革、改善の必要な当教会にとって一番ふさわしい神父様を神様が送ってくださったと思います。

神父様はすでに信徒総会の持ち方をいろいろ考慮されていて絶妙な方

法で信徒総会を持つてくださいました。誰もが自分の思っていることを言える状況を作つて進められ、一人ひとりは思い残すことなく素直に意見をのべていました。

あれほど難関だった最重要の役員改選も、新会長が全員一致で決定し、大きな喜びに包まれました。

夜が明けたようなビッグニュースです。当教会の新年度がスタートしました。普天間教会の信者さんがミサに与つて、「神父様を大切にしていね」と仰っていました、「もちろんです」と約束しました。

日曜日のミサの後、神父様の回りには人垣ができてなかなか近寄ることのできないもどかしさを感じてしまいましたが、当教会の活気に満ちた歩みはスタートしたばかりです。

石川教会役員

信徒会長 屋宜留美子
副会長 宮里ノイミ
会 計 伊波 克子
中曾根正和
伊波 里奈
通信員 仲本・高良
(仲本百子通信員)

ベビーシャワー(出産前祝)

コザ教会

当教会では、七月十四日のミサの後、ファミリー会員による妊婦さん三名の安全祈願のベビーシャワーパーティーがありました。古来より、沖縄では赤ちゃんが生まれたら名前をつけお披露目や満一才(タンカー

ユーエー)などの記念日を祝う習慣があります。外国では、赤ちゃんがお腹に宿ったことを祝い、祝福する習慣があり、ベビーシャワーもその一つでアメリカ合衆国が発祥とされているようです。母親の出産に対する様々な不安に対し、安産を願いエールを贈るのがベビーシャワーという文化で、もともと初めての出産を控える妊婦のために女性同志で楽しむ『女子会』のようなものと言われていました。最近では男性や子供の参加も認められているようです。ピーター神父様によるとフィリピンでは出産の安全を願う習慣があり普通に行われているそうです。今日では、ベビーシャワー文化がわが国にも普及し、それに特化したセミナー、ビジネスもあるようです。

さて、パーティーは当教会の信徒、妊婦さんの配偶者、親戚、代父母が参加し、幹事さんの司会により始まりました。エレミヤホール舞台前のデコレーションは青色で統一されていました。その前に腰掛けている妊婦さんの紹介とそれぞれの出産予定月(七月)、(八月)、(九月)が報告され、配偶者の紹介がありました。三名とも初産でなんと全員男児とのことでした。この時青色で飾られている意味がわかりました。このあと、神父さまのお祈りと祝福があり皆で安産を願いました。つづいて、ファミリー会の方が用意した食事に舌鼓を打ち、ゲームを楽しみました。少子高齢化が声高に叫ばれ問題となっている昨今、当教会にとって喜ばしい出来事でした。

(金城愛子通信員)



葬祭の「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

- *創業30数余年・・・。
- *皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
- *ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひ が たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく
☎098-853-1059

